

『ティアニー先生のベスト・パール 2』

ローレンス・ティアニー(著)・松村正巳(訳)

飯塚病院総合診療科 清田雅智

物事を単純化することは、しばしば行動を誤らせる原因になる。現実世界では、単純化されたマニュアル的な対応だけでは通用しないことがしばしば起こる。しかし細かいことにこだわらなければ、おおむねマニュアルは使い勝手がよいことが多い。

クリニカル・パールというのは、米国では昔から行われていた教育手段だという。日本でも、経験のある医師がしばしば臨床の“コツ”を伝えるという教育手段はあった。それは経験則として語られていたと思う。個人的な見解だが、日本で聞くその手の“コツ”というのは、しばしば誤用されて伝わっているものだったり、独善的な知識の場合もあると感じていた。それはその経験則が、何から導き出されているのか十分検証することがなかったからだと思っていた。私はそういう“コツ”を聞くと最初は疑いの目もち、書物や文献によって検証して納得したものしか信用していなかった。

過日の日本プライマリ・ケア連合学会で、私は初めてティアニー先生に症例を提示する機会に恵まれた。先生は一部の識者の間では、診断学では神の領域に近いと噂される人物と聞いていた。そこで約半年かけて症例を厳選し、おおむね40くらいの文献に目を通し、1940年代の文献も引いて根拠の裏づけも十分に行って臨んだ。先生は45枚準備

したスライドの4枚目、年齢、性別、主訴、現病歴4行しか提示していない段階で、ほぼ核心に迫る tentative diagnosis に至っていた。こういう例は枚挙にいとまがないそうだが、目の前でみると本当に恐ろしい人だと思った。一方で、その情報では理論上そのようにコメントするのが妥当だということも事前に検証して臨んでいたのも、その思考プロセスが合致したことは私としては嬉しかった。そのケースとは、common disease rare presentation の例で、前著『ティアニー先生のベスト・パール』よりパール26を引用したものであった。今回の新しい版ではパール96に該当する疾患であるが、今回の新版を読んでもみると、なんとパールの中身も進化していた！

パールには必ず単純化による限界がある。しかし、この人のパールは別格である。本書のパールには奥深い真理があり、読み流してはいけないと思う。私も隅々まで読み、その背景も調べることで得られるものがあつた。訳者の松村先生にも敬意を表したい。意図を汲めないと日本語と英語併記というのは難しかったはずだ。きっとさまざまなレベルの医師がこの本を利用できるであろう。

● A5 / 頁186 / 定価2,625円(本体2,500円+税5%)

2012年10月 [ISBN978-4-260-01712-1] 医学書院刊